

張鼓峯戰鬪の實相

陸軍中將 尾 高 龜 藏

私は張鼓峯の戰鬪も峠を越した昭和十六年八月十日に次の様な兵團命令を下しました、それは「尾高兵團は打つて一丸となり大楠公于早城の忠烈を偲び飽くまで國境線を確保せんとす」といふのであります。あのときの私の心境を次に中述べたいと存じます。

御承知の通り當時蘇軍は狙撃約三ヶ師團戰車約二ヶ旅團騎兵約一ヶ師團飛行機約二〇〇餘といふ優勢を以て我軍に對し來つたにもかゝらず七月の下旬以來連日の激戰で其内の狙撃二ヶ師團は八月七日、八日頃までに全く潰滅的打撃を受けて居り、最後に戰場に到着した第三の狙撃師團も八日九日の戰鬪で甚大なる損傷を蒙り、戰車旅團は二個旅團共既にその大半を或は焼かれ或は破壊せられ、降參兵がぼつ／＼現れて來るといふ狀況で、敵の戰鬪力は非常に弱くなつて參りました。之に反しまして受けて立つたわが方では此頃漸く兵團の全兵力が戰場に到着致しまして士氣は非常に振ひ戰鬪力は本事變開始以來最高度に充實したのであります。

正に大攻勢を取るに絶好の機會に際會したのであります。然るに依然として飽くまで國境線を確保するといふ一見消極的に見ゆる決心をとりましたのは、外見こそ消極戦法に見えますが、實質的には極めて重大なる積極的效果を期待して之を部下に要望したのであります。即ち六百年前大楠公の軍隊が千早城に立籠つて忠烈無比の勇戰を續け、寄來る敵

の大軍を徹底的に撃破することによつて、形の上では専守防禦を爲しながらも、其精神實質に於ては日本全國の隅々まで最も威力ある攻勢を取り、さうして建武中興の皇運を開くといふ偉大なる結果を收められたと同様に、わが兵團も至誠、純忠、平素の猛訓練の腕前を今こそ現はして金剛不壞、鐵壁の威力を發揚し、敵をして此上、日本軍に双向ふことは恰かも生卵を鐵壁に打つゝけるも同様で自ら壞滅するのみであるといふ現實を嚴肅深刻に體驗せしめることに依つて、わが國の支那事變完遂を妨害せんとする如何なる國の野望をも根柢から粉碎し盡せよとの強い要求を披瀝したのであります。

御稜威の下、上司の適切なる御指導隣接友軍の極めて力強い御協力と、幸ひに部下將兵諸君が克く此の困難なる命令を嚴守して御奮闘して下さつた御かけによりまして、三年前の今月今日停戰協定は成立し、間もなく漢口、廣東相次で陥落するや、板垣陸軍大臣からは

「皇軍が北方に煩はされることなく豫定の通り漢口、廣東を攻略するを得たのは貴軍の張鼓峯に於ける果敢なる戰鬪に負ふ所大なり」

との感謝の電報を頂くに至りました。

又、吉井勇氏は次の如く詠ぜられた。

「張鼓峯、うつし世にして現身まぶらの堪ふる限りをたゝかひしかな」

部下將兵諸君は實によく戰つて呉れました。凡ては三年後の今日もなほ、腦裏にハッキリと印象されてゐるのであります。